

【特集】
エーゲ海、ミコノス島
神々のヴァカンス

town navigation

クルマで行く旅

沖縄、本島。

tomorrow interview

市川染五郎



エーゲ海・ミコノス島 神々のヴァカンス

アテネから飛行機で1時間。紺碧のエーゲ海にぽつんと浮かぶミコノス島は、

真っ白な家と美しいビーチで有名な、国際的なリゾート・アイランド。

頭上には古代と変わらぬ太陽が輝き、ギリシア神話が今も人々の心に生き続ける伝説の楽園。

眩しい陽光とエーゲ海からの風に包まれて過ごすひととき……。

神々が交歓する島でのヴァカンスは、休息とすこやかな精神を与えてくれる。



カト・ミリの丘に建つ風車の粉ひき小屋



メルテミアと呼ばれるエーゲ海の北風が吹きはじめると、ミコノス島に夏がやってくる。人々はローラーや刷毛を手し、壁という壁を石灰塗料で真っ白に塗り直し、ドアやバルコニーを鮮やかなブルーやグリーンで彩りはじめる。心浮き立つ夏の準備が、街のいたるところでいつせいに繰り広げられるのだ。

白い家並みと

まばゆいばかりの白い家並み。紺碧の空と海。白とブルーに染め分けられた見

紺碧の空

迷路、急な坂道、

そして教会……

ミコノス島を訪れる人々の目に、まさきに飛び込んでくるのが、白一色の街並みと、教会の赤い屋根。幻想のなかに浮かび上がる架空の都市のように、神話の島は秘密めいた空気を漂わせている。



白い壁と青いドア。色の対比が美しい



事な色の対比がকাশし出すエキゾティシズム……
1950年代半ばから、ヨーロッパの夏のリゾート地として脚光を浴びはじめたミコノス島。ここにやってきた人々の心をまさきにとらえたのが、この真っ白な家並みとエーゲ海の青が作りだす美しい風景だった。

人口の大半を失うほどの打撃を受けた。それ以来、除菌作用のある石灰を、家の中ばかりでなく、外壁、階段、家畜小屋、路地……と、ありとあらゆるところに塗るようになったのだという。石灰の原料となる石灰岩が近くで大量に産出するということがあったらう。

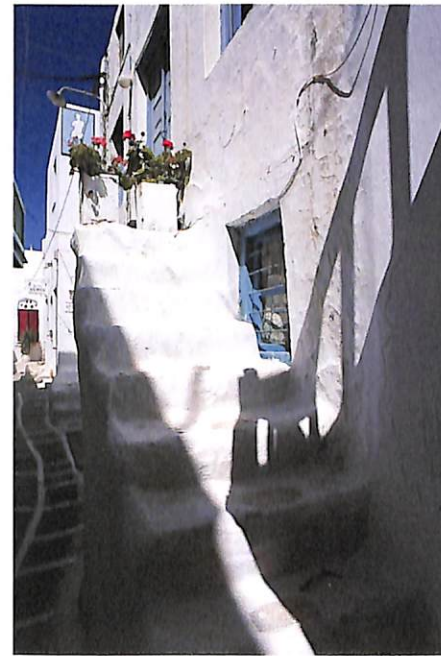
まぶしい陽光をはじき飛ばすかのような白い造形物。何度も何度も塗り重ねられてきた石灰のでこぼこした分厚い壁は、苛酷な自然に対峙して生きてきたミコノスの人々の、生の証しのように輝いている。



白い街に鉢植えの花が鮮やか



ミコノス島には400以上の教会がある

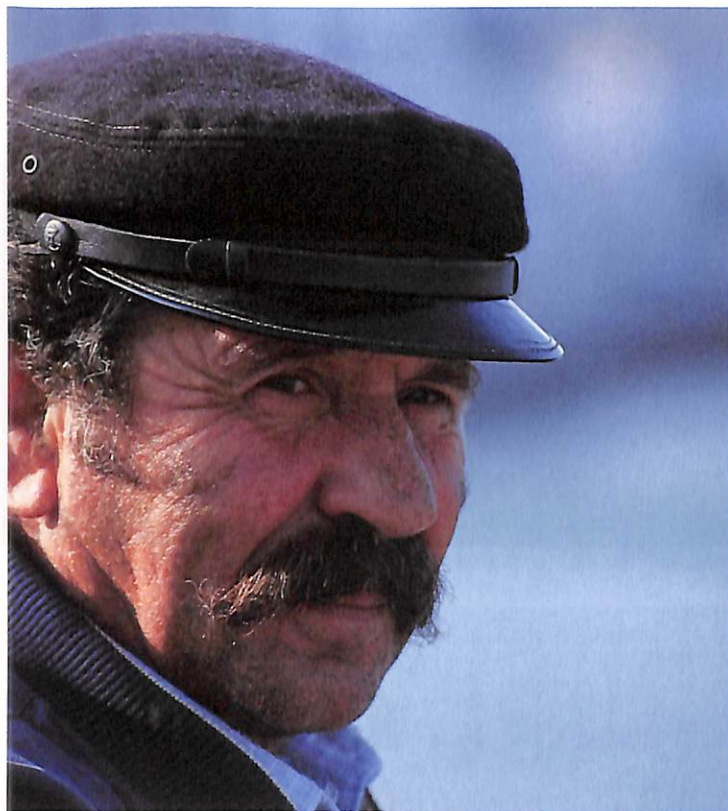


ミコノス特有の外階段。雨が降ってもここを歩いて1階から2階へ

洞窟のようなパラポルティア教会

15世紀につくられた街並は迷路のよう





路地を舞台に生きる 素朴でおおらかな人々

ミコノス島の中心街は、波止場から急にせりあがる丘の斜面に集中している。折り重なるように密集する家、家、家。狭い路地が右に左に折れ曲がり、迷路のように入り組んでいる。15世紀に自然発生的にできたというこの迷路の街が、じつはミコノスにやってくるリゾート客をひきつけてやまない。

路地を曲がるたびに、不意に現われる居酒屋、土産物屋、教会……。迷路の散策には意外な出会いが待ち受けている。迷子になっても、それが旅人の楽しみに変わるような、穏やかな街の雰囲気と気さくな人々。カフェニオンにたむろして、ウゾを飲みながら声高に喋り合う議論好きの男たち。女たちだって、負けてはいない。狭い路地に椅子を持ちだして編み物をしながら、つきることのないお喋りに興じている。風のよるに走り抜けるいたずら坊主。叱りつけるおばあさん。

ここに住む人々は皆いい表情をしている。子供は子供らしくいきいきと、老人は老人らしく堂々と。どうすれば、どんな生活を送れば、こんないい表情になれるのだろう。ここミコノス島には、克蘭と呼ばれる父系の血縁社会が根強く残っている。家長である父親が家族を守り、同じ克蘭に属する親戚同士の結束がきわめて強いのだ。という、かつての日本の封建制度のようなものを感じさせるが、そうではなく、相

互に助け合うという共同体のシステムが、昔から変わることなく、現在にまで綿々と生き続けているのである。

ギリシア正教の影響も大きいだろう。島民10人にひとつの割合であるという数えきれないほどの教会。ここには先祖代々の遺骨が壁や床に埋葬されている。教会というよりも納骨堂といった感じに近いだろうか。1日中ろうそくの灯りが絶えることなく、若者も仕事帰りに立ち寄って線香をあげていく。ふだんの生活の中に宗教がごく自然にとけこみ、それがミコノスのいい意味での伝統を守り続けている。

国際リゾート地として多くの観光客を集めながら、ミコノスの人々が昔のままの素朴さとおおらかさをもち続けていられるのは、こうしたことも関係しているにちがいない。

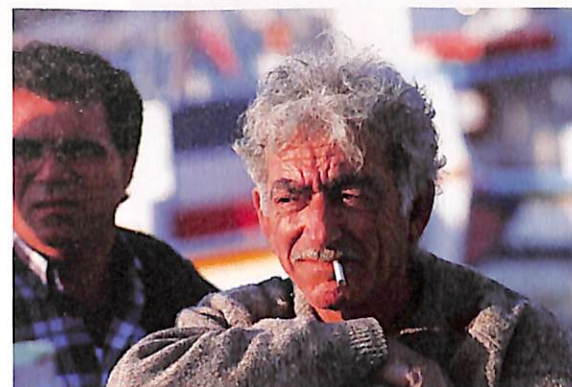
リゾートにやってくる人々が、街の散策を好んでするのも、現代では失われてしまった牧歌的な生活を一瞬でも共有したいからなのだろう。ミコノスは古代と変わらぬ時間が流れる最後の楽園なのだ。



魚をねだるペリカンのベテロ君はミコノスの人気者



アコラと呼ばれる大理石の台が魚市場になる



ギリシアの男はくわえ煙草が似合う



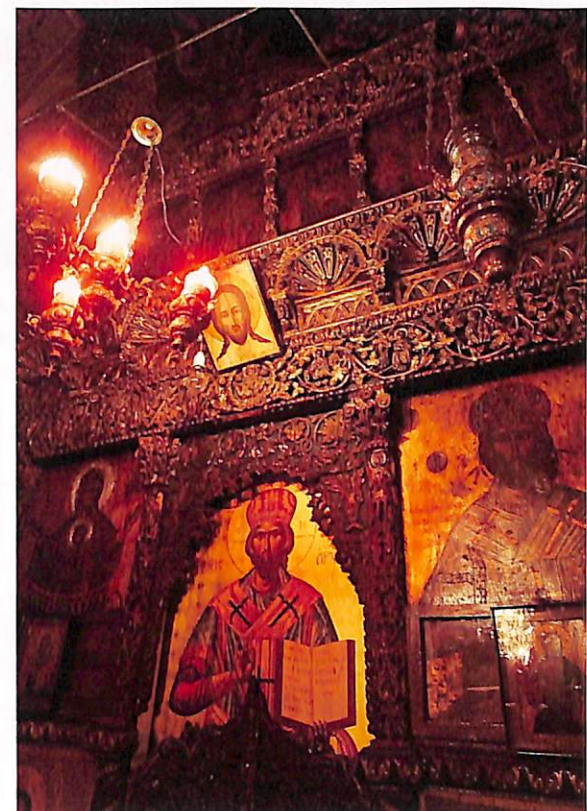
路地はコミュニケーションの場でもある



ディココビ(昼寝)のあと海辺で一日を過ごす



ミコノスではファミリーの結束が強固



アイコンで埋めつくされたギリシア正教の教会内部



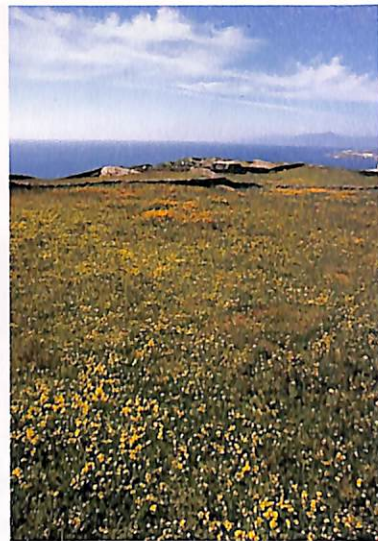
ビーチはやっぱりパラダイス



美しい砂浜が広がるパラダイスビーチ



ミコノスの自然は厳しい。冬には雪が降ることも



美しく咲き乱れる花も夏には炎暑で枯れてしまう



黙々と歩いていったロバと老女

内陸部に入ると荒涼とした丘陵地が広がる



大地と空を眺めながら 神話をつくりだした 羊飼いたち

島の内陸部に入ると、そこは荒涼とした丘陵地。大地と空、ゆったりと流れる時間、吹きわたる風……。羊飼いが夢想した神話の世界が今も息づいている。



エーゲ海の島々の自然は厳しい。むしろ、苛酷といったほうがいいかもしれない。灰褐色の岩肌をみせる丘陵地、その合間にしがみつくように点在する農家、わずばかりの耕地。咲き誇る花々の下には、茶色に乾燥した草花の残骸が見え隠れしている。乾季が最も厳しい8月になると、あまりの炎暑のために花々は立ち枯れてしまうのだ。街の中心部から、ほんの10分ほどクルマを走らせるだけで、こうした荒涼とした風景が広がっている。テオ・アングロプロス監督の映画「旅芸人の記録」のなかで、巡業する一座が黙々と歩いていった、まさしくあの光景。むしろ、これこそギリシアの島々

の本当の姿なのかもしれない。曲がりくねった道を曲がるたびに、小さな丘を越えるたびに、風景は一変し、海が現われ、羊の群れが現われ、小さな集落が現われる。かすかなひびく音に目をこらすと、ロバに乗った老女がやってくる。ゆっくりと、ゆっくりと。丘のゆるやかな道を曲がりきるとひびく音は不意に途切れ、今度は羊の首輪につけられた鈴の音、蜂の羽音が風に響いて聞こえてくる。風向きが変わるたびに、風が運ぶものもここでは違う。ここにあるのは、大地と空だけ。そして、ゆったりと流れる時と、吹きわたる風。すれ違った牧童が白い歯を見せて笑顔

をよこす。真っ赤なデイバックを背負い、髪を長く伸ばしたアウトロー風の現代の羊飼いが、ふとギリシア神話の神のようにみえる不思議な一瞬。古代と変わらぬ風景に包まれていると、かつて羊飼いが夢想した神話の世界が、そのまま今も息づいていることに気づかされる。ここでは古代は本当に近い。あるがままの自然に身を委ねて、あるがままにそこにあること。それがまさに休息のヴァカンスなのだということを、いまさらのように思い知らされる。置き忘れてしまった、ごく当たり前のこと。ミコノスの丘に佇めば、すこやかな精神が宿りはじめる。



吹きわたる風が電線のうなり声や蜂の羽音を運んでくる



紀元前7世紀の神殿や柱廊がそびえ立つ



ミコノスからデロス島へは船で40分



キントス山からデロス島の遺跡を一望する

LIFE DESK SERVICE INFORMATION

■LIFE DESK パリ
(国際認識番号)-33-1-4495-8568
(ギリシアからのお問い合わせの場合、パリでの受付となります。)
電話受付時間 9:00~17:00 (年中無休)
この他にも、ヨーロッパ各国にLIFE DESKがございます。またパリ、ロンドンにはレセプションカウンターがございますので、パリ、ロンドン方面にご旅行の際は、ぜひお立ち寄りください。



大理石のライオン像。9頭のうち5頭が残っている

One day トリップ Exploring Delos Isl.

クルージング・ツアーで 古代遺跡が残る 無人のデロス島へ

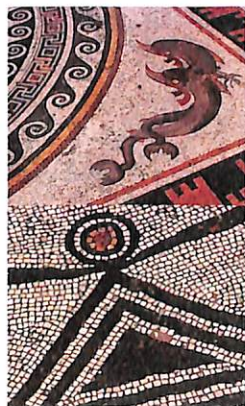
ギリシア、エーゲ海へ行くのならば、ぜひとも古代ギリシアの遺跡を訪ねてみたいし、クルージングも楽しんでみたい。そんなぜいたくな願望をかなえてくれるのが、デロス島への日帰り旅行だ。ミコノス島から船で約40分。キラダス諸島の中心に位置するデロス島は、紀元前7世紀の遺跡がそのまま残る無人の島。

かつてのデロス島はポリス国家アテネが結成した海上同盟「デロス同盟」の本拠地だった。太陽神アポロンと月の女神アルテミスが生まれた聖地としても知られるが、紀元前1世紀には滅ぼされ、19世紀に発掘されるまで、ずっと廃墟のままだった。そのせいだろうか、風雨にさらされ続けた古代都市の神殿や柱廊が、圧倒的な迫力でせまってくる。市街地にこじんまりと保存されている遺跡とはまたひと味違った、ダイナミックな時の流れが実感できるはずだ。島でいちばん高いキントス山から遺跡を一望するのが気持ちいいが、無人島なので帰りの船の出航時間には気をつけたい。

このほかにも、エーゲ海の島々を巡るクルージング・ツアーには、1日でいくつもの島をまわるものから、1週間かけてエーゲ海からトルコのイスタンブールにまで航海するものまで、目的地・日程別にさまざまなコースがある。ホテル並みの船で、ショーやゲームを楽しみながら優雅な船旅を満喫するのも悪くない。ただし、夏の旅行シーズンは早目の予約が必要だ。



風雨にさらされたレリーフ



モザイクタイルも見事



保存食のソーセージでもてなしてくれた



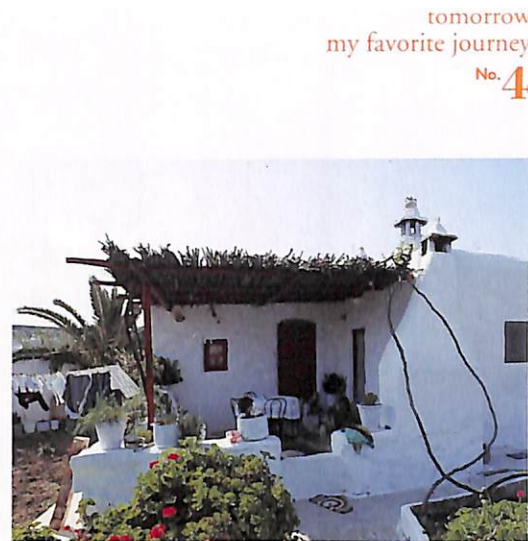
クークス氏一家。長女はもう結婚したという



クークス氏の家畜小屋には豚、ニワトリ、ハト



ハト小屋。ミコノスの農家は食用にハトを飼っている



全部自分でつくったというニコス・クークス氏の住宅

点在する農家の一軒をのぞきこんでいると、陽にやけた人なつこい笑顔が現われて、「まあまあ、見ていけばよ、家の中や葡萄畑を案内してくれる。ニコス・クークス氏、54才。10年間、デイスコで昼夜なく働いて、念願のファーマーになったのだという。敷地内にはブドウやオリーブなどの果樹園、野菜畑が広がり、豚やニワトリなどの家畜を飼っている。ミコノスの農家はどこもそうだが、牛や羊などの家畜を必ず育てている。家畜の糞で土壌を改良するという、やせた土地で自給自足していくための知恵。これは、おそらくホメロスの昔から変わらないやり方なのだ。」「秋になると、ヒロスファヤという行事があって、神に感謝しながら豚を屠殺する。翌

自給自足のミコニアン 牧歌的な



パンももちろん自家製

年分の肉を確保するのさ」と見せてくれた大きな保存容器の中には、塩漬の肉、脂肪からつくったラード、燻製のソーセージ、ルーザと呼ばれる豚のフィレ肉の生ハム……。それらを食卓に並べて、自家製ワインの大瓶があげられた。通りすがりの旅人だというのに、この温かいもてなし……。スバイスとハーブがきいた野生的なソーセージ。自家製ワインもまたとびりおいしい。牧歌的な暮らしから生まれた食べものは、肉体よりも精神の糧であるような気がする。すすめられるまま杯を重ねるうちに広がっていく、心地よい酔い。ヤス（乾杯！） ヒロクセニオス（人をもてなす者）を自認する陽気で親切的なミコニアンに乾杯！ 神々のヴァカンスに乾杯！

西川 治
旅する
胃袋 No.4

蛸のマリネ

海の中の島々
(ギリシア)

デロス、ロドス、コス、エギナ、ボロス、イドラ、クレタ、ミコノス、ミノス。これらはすべてエーゲ海に浮かぶ島の名前である。歴史と神話の間を行き来するような気分を文字と写真を見ながら過ごした世界史の授業中を思い出す。

いずれの島も青い海と明るすぎる太陽にさらされた島々だが、僕が最初に出かけたのはミコノス島だった。

海岸線を散策していると、波打ちぎわの岩の上で、なにやら大きいものを持った手を振りあげ、足元の岩にぶつけている男がいた。しかも、何度も繰り返している。なんだろう、という好奇心に背中を押され、男に近づいた。男が手にしているのは蛸。僕が近づいていっても、男は一心不乱におなじことをくり返している。しばらくすると、彼は蛸に塩をかけ、もみ始めた。と思うとまた岩にぶつけている。どうして蛸を岩にぶつけるのか、と尋ねると、蛸の肉を柔らかくするために、これを100回も200回もくり返すのだ、と教えてくれた。そして、このあと日陰で3・4時間位干して余分な水分を抜くとも。

その日の夜はその男に教えてもらったタベルナに行った。するとその店の軒先にも蛸が干してあったので、頼んでみた。どう料理するのか見ていたら、ブツ切りにし、外にある暖炉で炭焼きにしている。それを皿に盛り、パセリとニンニクのみじん切りとオリーブオイルをふりかける。それだけ。それにレモンをしぼって食べる。これが旨い。これを肴にウーゾを飲む。他になにを食べるか、と聞かれたのでフリアテッキというサラダを注文。これは簡単。キュウリ、トマト、レタス、オリーブ、そして羊の乳からできたフェッタチーズが入っているだけのものだ。これもレモンをしぼって食べる。しばし体がしびれるようなウーゾの酔いに体をまかせた。

蛸(1尾)を串にさし、炭火を起こしてこんがり焼く。焼いている間にイタリアンパセリ(大さじ5)とニンニク(2片)のみじん切りにする。蛸が焼けたら食べやすい大きさに切る。これをボールに入れ、塩(小さじ1)こしょう(焼きたてのものを小さじ1)をし、先ほどのパセリ、ニンニクとオリーブオイル(1/2カップ)を入れ、よくあえる。食べるときにレモンをたっぷりしぼる。

にしかわおさむ 写真家・作家
1940年生まれ。世界数ヶ国を旅して遊びと味に精通。ダイナミックな料理人としても評判が高い。著書多数。

写真・料理・西



氷や水を入れると白濁するギリシアの酒、ウゾ。アルコール度40%。
左drs350、右drs300

ミコノス島の白い家並みや教会をかたどった置物。どれもdrs1800



←船員帽。黒いレースがついていて、なかなか洒落。 drs1500



←ギリシア正教の司祭をかたどった木製置物。 drs4000



←ラグビーボールの形をしたユニークな革バッグ。 drs2500
↓海綿はギリシアの特産品。 drs1000



銀のアクセサリー
イルカのネックレス
drs4800
ふくろうのピアス
drs2400
古代彫刻のピアス drs3600



↓タコもギリシアのシンボル。小さな置物だが、表情がユーモラス。 drs500



キーホルダー
手前のイルカのものから時計まわりに
drs1800、drs3500、
drs1800、drs3200、
drs4000、drs1500



革のサンダル。皮革製品も安く良いものが多い。どれもはきやすいデザイン。 drs2400



↓ワインの栓。 drs2000



古代ギリシアの陶器のレプリカも豊富。
←壺：drs4500
←鶏：drs3600



ミコノスタウン
ショッピング・ガイド

ミコノス島の船着き場から丘の中腹にかけて広がるミコノスタウンには、土産物屋、タベルナ、ディスコ、宝飾店などが、びっしりと軒を連ねている。手頃な値段のスーベニールから、ギリシアならではの黄金文化を背景にした高品質の金製品まで、ショッピングの楽しみもさまざま。とくに、金・銀製品、皮革製品はお買い得。

※表示はすべてdrs(ドラクマ)。
94年4月現在、1drs=約0.5円

ツアーで楽しむ
ギリシア

ミコノス島で満喫する
エーゲ海の旅
『ギリシャ紀行8日間』

白一色の家々が立ち並び、迷路のような路地が異国情緒を感じさせるミコノス島を満喫できるツアーがご紹介します。このツアーはミコノス島で2日間の自由行動がある、ゆったりとしたスケジュールです。また、アテネの観光もお楽しみいただけます。
出発日、料金は以下の通りとなっております。
7月3日から9月25日までの毎日曜日(7/10、7/31、8/7、9/4は除く)出発。
料金は278,000円～。最少催行人数10名。添乗員が同行します。

○上記ツアーのほかにもたくさんのツアーをご用意しております。日程、料金、出発日など詳しくは下記までお問い合わせください。また、本誌掲載込みハガキでもパンフレット(無料)のご請求ができますのでご利用ください。
●お問い合わせ先
〒101 東京都千代田区神田駿河台4-3 新お茶の水ビル18F
運輸大臣登録一般旅行代理店第3893号
株式会社ライフ トラベルショップお茶の水
TEL: 03-3233-9119